

も途中で皮疹が出現し維持量に達し得なかった。その理由としては、サラゾピリンの増量が Holdsworth の方法では早すぎる為ではないかということが考えられ、今後脱感作療法に対し、サラゾピリンの増量を再検討する必要があると思われた。

20) 当院における潰瘍性大腸炎23例のまとめ

坂井洋一郎・羽賀 正人 (新潟勤労者医療協
安達 哲夫・山川 良一 (会 下越病院内科)

当院で経験した潰瘍性大腸炎23例についてその臨床像を中心に検討した。発症時の年齢の平均は40.4才で、性別は男性8例女性15例と女性に多かった。経過観察期間の平均は7.8年であった。重篤な合併症として大量下血(1例)、中毒性巨大結腸症(1例)、両者の合併(1例)を認めた。妊娠を合併した1例は中毒性巨大結腸症と高度の貧血を認め手術が施行された。サラゾピリンによると思われる無顆粒球症が1例認められた。手術例は4例で全大腸炎型、重症例、画像診断上明瞭な潰瘍を伴っていた。手術を施行した理由は内科的治療に抵抗(2例)、大量下血(1例)、中毒性巨大結腸症+大量下血(1例)であった。
